

## 友人からの手紙

橋上 猛雄

先日、富田林市に住む歴史好きの友人から手紙が届いた。私が調査にかかわっていた『大阪狭山市史第七巻石造物編』に間違いがあるという。同市加太にある黄檗宗の龍雲寺には、狭山藩主北条氏の墓所があるが、『市史』では五代藩主氏朝の息子「氏従の墓石が安置されていることになっているが、現在は見あたらない」と記載されている。

しかし友人は、無縁塔の中に存在すると指摘してくれた。私は早速龍雲寺に足を運び、友人の指摘通り、氏従の墓石を無縁塔の中から見つけ出した。『市史石造物編』では、市内の墓地のすべての石造物を調査し、もちろん無縁塔の墓石も調査していた。だが、富田林市にある龍雲寺では、朝比奈氏などの狭山藩関係の墓石を墓地から調査したが、他の墓地のように、無縁塔のすべての墓石を調査することは無かった。

その無縁塔の中に、藩主の息子の墓石があったのである。龍雲寺には、北条氏の墓所が塀に囲まれて存在し、氏従の兄弟五人の墓もそこにあるが、どういうわけか、氏従の墓石だけは、無縁塔の中にあつた。

友人は続けて、無縁塔頂部の「永暁院殿貞良融室大禅定尼」と刻まれた墓石も、北条一族であろうと指摘していた。私は、その頂上にそびえる墓石を見て、大変驚いた。それは、五代藩主であり狭山藩中興の英主とうたわれた氏朝の側室であり、氏朝の愛情を一身に集め、十四人もの子どもを産んだ久子の法名であったためである。

彼女は、元文二年（一七三七）江戸で亡くなったと推察されるが、私の調べでは宝永四年から享保十七年までの二十八年間、狭山の陣屋で暮らしたと思われる（氏朝が伏見奉行の時、伏見に住んだ時期もあったが）。氏朝が遺した「日記」には、久子の妊娠、出産、子どもたちの宮参りや食い初めなどの人生儀礼の記事が数多く見られ、殿様の夫や親としての顔が垣間見え、「日記」の行間からは幸せな夫婦の情景が読み取れる。

氏朝の側室である久子の墓石や子息の氏従の墓石は、本来は北条氏の墓所にあつたと推測できるが、永い歴史の中で、様々な理由から現在の姿になったのであろう。陣屋に最も近い菩提寺である龍雲寺に、彼女が生んだ六人の子どものとともに、久子は祀られていた。

友人からの手紙は、私に悉皆調査の重要性と、歴史の真実の一面を教えてくれた。



旗指物(神奈川県立歴史博物館蔵)



陣羽織(神奈川県立歴史博物館蔵)

「狭山と北条氏 一秀吉から明治維新まで」大阪狭山市立郷土資料館発行より転載